

復興で大切な被災者の心のケア ・松平信綱と保科正之（三）

作家 童門冬二

インフラには恕の精神を

松平信綱はいわゆる“戦後派（アプレゲール）”だ。合戦は知らない。武士ではあるが（文史派）だ。したがって“民はよらしむべし”の意義づけもそれなりに考えた。

川越城主として大火後の復興事業を成功させたかれが、今度は江戸の大火災“振り袖火事”の後始末を行うに当って、この“民はよらしむべし”という、幕府の政治理念とどう結びつけるべきか。

知的官僚としてのかれはまず、
『インフラ（都市の基盤整備）だ』

と考えた。かれは“よらしむべし”の基本理念をつぎのようにとらえた。

- ・民を政治によらしむる（頼らせる）には、幕政と幕府への信頼感が必要だ
- ・信頼させるには、民に“安心と安全”の江戸生活を保証することである
- ・そのためには大火災後の復興はそのことを念頭においた事業計画が必要だ

ということだった。ハード面における復興事業の内部に、ソフト面（温かい思いやり・愛情）を含めるということだ。「住む者・使用者の立場に立って」住宅や施設を設計する、ということだ。

この時代のインテリ武士の傾向である、“恕（じょ）の精神”を重んずるということだ。恕というのは論語に書かれた孔子の教えで「相手の立

場に立って考えるやさしさと思いやり」のことだ。

徳川権力の頂点に立つトップマネジメントグループ（老中・閣僚）のひとりで、エリート官僚の代表である信綱が、現代の民主主義的官僚だったとは考えにくい。が、埼玉県や東京都内に残した諸事蹟は、やはり民のための物だ。そして信綱の事業を容認し、支持したのは会津藩主の保科正之だ。

後藤新平の首都東京の復興策

私は今別な所で「後藤新平」を書いている。かれの大正12年の関東大震災後の、“帝都（東京）復興”にウエイトをおいている。新平が「復活復旧でなく復興だ」

といい切ったのには政治的主張がある。それは、「日本の帝（首）都は東京である」

ということを震災後の復興によって示そうとした意気込みだ。“興”という字は興（おこ）すということであり、古いものを復元するのではなく、新しいものをつくり出す、というクリエイティブな意味を持っている。即ち創造だ。後藤新平はそのことによって、

「日本の首都は東京である」

ということを確立したかった。当時は、「京都もまだ首都だ」

という考えが残存していたからだ。これは「日本の首都は東京である」という、法的手続きをキ

チンとしない当時の政府の責任だ（京都や近畿地方の住民感情を気にしていた）。

その確立のためには、帝都らしいインフラが必要だ。新平はそのために“大風呂敷”とよばれる大計画を立て、30億をこえる予算を要求した。結果は予算は3億に減らされたが新平は落ちこまなかった。かれには、「衛生思想の普及、特に下水の整備を核にして」

という新しい開発事業の提起があったからだ。これは今でいう被災者の“心のケア”につながる発想なのだ。

いつの時代にも必要な“心のケア”

私が“災害後の事業には被災者の心のケアを欠くことができない”

と認識させられたのは、阪神の大震災の時だ。震災直後、阪神の商工会議所など数市から、「被災者の心のケアをテーマに話をしてほしい」という依頼がきた。私は途惑った。復興といえばハード面を中心に考えていた私には、「何を話せばいいのだろうか」

と、話の内容の選択に迷った。結局は、「傷いた心を癒やし新しい勇気を振るい起こす助長剤になる話」

ということになったが、その後自衛隊から同じ依頼がきて、この件に対する私の途惑いは氷解した。自衛隊幹部の説明はより具体的だったからだ。

・自衛隊の復興作業は、初動期には遺体の捜索が多い

・発見した時には一種の達成感もあるが、多くは直視した遺体の姿による衝撃におそわれる

・これがトラウマになってその後の自衛隊員を苦しめる

「救ってやって下さい」

幹部は真剣にいう。切実などという段階を越えている。私もたちまちその自衛隊員の心境に引きずりこまれる。

松平信綱も同じだった。心のケアは江戸時代にも必要だった。こんごの避難を容易にするために信綱は隅田川に両国橋を架けた。武蔵国（江戸）と下総国（千葉県）のふたつ（両）の国にまたがるから、“両国”と命名したのだ。

大火災の時、火を逃れて市民の多くが川にとびこんだ。ところが火は川にも及んでいた。隅田川は煮る熱湯だった。とびこんだ市民の多くがこの熱湯で殺された。

もがき苦しむ当人と、この地獄を岸から見ていた目撃者に凄じい衝撃を与えた。とくに生き残った者には忘れられないトラウマとして残された。

信綱はこの面（心のケア）にも立ち向かわなければならなかった。後藤新平も同じである。どのように対応したのだろうか。

信綱の場合は架け両国橋の両袂を

「市民芸能館」

にしたことだ。漫才・落語・講釈・手品・ガマのあぶら売りなどの、演技を競う大衆演芸劇場にした。小屋掛けはしない。屋根は空だ。だから雨の日はひらけない。青空劇場である。

災害から他の物に目を向けさせる意識操作だが、江戸の市民は乗った。両国橋の袂は屈指の歓楽街に発展していった。

「そんなやり方は本質な解決じゃない」

と目を剥く向きもおられるだろうが、当時の市民は喜んだ。しかし“熱湯地獄”は忘れられることはなかった。いつになっても今回の出来事のように語られた。

ちなみに後藤新平は、

「架ける橋は渡るだけではない。見ても楽しめるものにしろ」

と架橋者に命じた。画家に想像図を描かせたという話が伝えられている。新平もまた、「都市の光景はひとつの文化である」

と考えていた。それには何といても“心のケア”が完全に行われていなければならない。